

## 日本学術会議数理科学委員会数理科学振興策検討分科会の提言について

深谷賢治（第19期学術会議の数理科学委員会数理科学振興策検討分科会委員長）

第19期学術会議の数理科学委員会では、数理科学振興策検討分科会を設け、数理科学研究と若手養成の問題点について検討を求めた。同分科会では2度のアンケート調査を行うなどして、現状把握につとめ、その上で数理科学研究者コミュニティおよび大学当局、行政、その他関係諸団体に対して提言を行った。提言「数理科学における研究と若手養成の現状と課題」は学術会議のホームページ

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/division-15.html>

におかれており、読むことができる。以下では、ごく簡単にその要点を述べる。なお第19期学術会議数理科学委員会関係の意志表出はもう一件、数理統計学分科会による「数理科学分野における統計科学教育・研究の今日的役割とその推進の必要性」があり、これも学術会議のホームページ

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/division-16.html>

におかれている。

### （1）アンケート調査の経緯など。

提言をまとめるに当たっては、2度にわたり全国の数学・数理科学関係の諸集団にアンケート調査を行い、お忙しい中多くの回答をいただいた。また、国立22大学および教育系の連絡会からは、提言をまとめる途中で貴重なご意見をいただいた。ご協力に深く感謝したい。

アンケート調査が2回になったのは以下の理由である。1回目のアンケート調査ではできるだけ多くの数学・数理科学関係の方の状況を把握したいと考え、アンケート調査の対象をできるだけ広げた。我々が、数学・数理科学者の大学における状況の多様性を十分に認識していなかったせいもあり、結果的にいただいた回答を統計数字としてまとめるのはきわめて難しいものになった。そこでアンケート対象をより絞り、聞く内容も再検討した上で2回目のアンケートを行った。従って、提言の統計資料としては、2回目のものを用いている。一方、1回目の

アンケートの自由記述欄には、多様な数学者（数理科学者）集団が現在置かれている多くの問題を把握するために重要な意見が多く載せられていたので、これについては、回答者から了解を得られたものについては、そのまま提言の資料編に収録してある。これらの資料は、今後も日本の数学・数理科学の研究・教育の状況を把握するための資料としてご利用いただければ幸いである。

## （２）現状認識.

提言の要旨の部分から、現状認識に関わる部分を抜粋する。

博士号取得者の常勤ポストの減少などにより数理科学の若手研究者の層が薄くなっている。基盤的研究費の減少等により、中小規模大学を中心に研究のための最小限のインフラストラクチャーが崩壊し、また研究時間の大幅な減少等が起こっている。これらが理由で、日本における数理科学の研究水準は、近い将来大幅に低下する危険が大きい。

## （３）数理科学コミュニティーに対する提言の抜粋.

① 博士号取得者のキャリアパスの拡大と博士課程学生定員の再検討が必要である。② 数理科学と他の学術や社会との接点となる分野を強化すべきである。③ 任期付ポストの導入・運用の将来像を検討すべきである。④ 数理科学研究者コミュニティーによる中小規模大学での数理科学研究の支援が必要である。

数学通信の読者は主に数理科学コミュニティーに属する方だと思われるので、大学当局、行政、その他関係諸団体に対して提言の部分はここで省略する。上記学術会議ホームページにある提言本文をごらんいただきたい。